

「硫黄島への想い」

佐藤九州男（25／2航通）

全世界を震撼させ、蔓延を続ける新型コロナウイルスへの対策で今春3月28日の硫黄島での日米合同慰霊祭は取止めとなった。が、「硫黄島協会」との仲介の労をとってくれた二世会の神保明生氏からの切なる要望で「硫黄島への想い」を綴ることとなった。本来は、念願の、硫黄島に佇んで想いを綴る筈であった。硫黄島で尊い命を捧げることとなった栗林中将を始めとする2万余の将兵の心の中を思うと、黙して語らぬ訳にはいかない。硫黄島防衛の為、正に死に物狂いの戦闘を続け米軍の誇る海兵隊の猛者連を恐怖と驚嘆させた飽くなき死闘の軌跡について語らねばならない。硫黄島守備司令官となった栗林忠道は長野県松代中学校から陸軍士官学校第26期生として入校、騎兵科出身、陸大合格後米国留学米国第一騎兵師団付きとなってハーバード大ミシガン大の聴講生としてアメリカ史とアメリカ国情を詳しく学びアメリカを客観的に評価出来る知識を持つこととなった。その彼が運命の皮肉とも言える立場に立つことになったのである。然し乍らその戦闘の経過は偶然に拠る物ではない。栗林司令官の戦闘計画に拠る進行であり緻密な計画と身の労を惜しまない努力と知力の結集の齎らした成果であった。硫黄島は南北約10km程の島であるが、その形

状は大盛りのソフトアイスのコーンカッ
プ入りを斜めに傾けた形で小笠原諸島の
南の果てに浮かぶ島である。ここが彼、
栗林司令官の率いる2万の将兵の命を賭
けた70余日の死闘の戦場となつた。アッ
ツ、キスカ、サイバンと従来の島嶼防衛
は敵を揚陸させまいとする水際作戦で
あつたが、艦砲射撃と空爆による物量作
戦の前には効果を上げ得ず否寧ろ敵の歡
迎する所となる事を読みの中に入れた司
令官は最も長続きする最も苦難に満ちた
長期抗戦を計画したのであつた。島は太
古の昔、海底火山の噴火によつて隆起し
た石灰岩主体の火山島で、その名の如く
今も硫黄の匂いの漂う地盤から成り嘗て
受けた火砕流で強度の高い石灰岩は地下
陣地の構築に利用された。兎に角この強
固な石灰岩を味方にして防禦強化を図る
より無かつたのである。結果論ではある
が島そのものが無くなつてもおかしくな
い砲爆撃にも耐えたのだから地下陣地構
築に賭けた読みは正解だつたと云えよ
う。兵力、火力に於て劣勢の部隊が如何
に戦うかは、如何に戦を長引かせるか如
何に敵を苦しませるかかの戦闘に成らざる
を得ない。栗林司令官は当時53歳だが自
らが守るこの島を知る為に島の全てを自
らの足で調べたのである。当時馬は2頭
程居たが馬に与える水を節約する考えか
ら自ら杖を突き乍ら島の隅々まで視察を
繰り返して防衛陣地構築の構想を練られた

事と想われる。偶に内地から贈られてく
る新鮮野菜は総て隊長以下に配られ自
らは口にされなかつたと知つた。司令官
はどうあるべきかを考え抜かれた信念に
は唯々敬意と反省で対応せざるを得な
い。2万の部下の命を預かつた司令官は
如何にあるべきか將に命がけて対応され
た防衛計画であつた。パンサイ突撃で一
挙に命を捨てる事は慎むべき状況である
と読み取り如何に対応すべきかを必死に
追求された結果が強固な地下陣地構築に
よる徹底的長期抗戦即ゲリラ的地下戦闘
で耐えることを企図されたのであろう。
地下壕主体の守備陣地の構築は戦闘の合
間にも続けられ長期戦必至の戦闘に引き
ずり込んだのである。結局米軍側死傷者
2万8686人(内死亡者6821人)
に対して 日本軍死傷者2万1152
人(内死亡者2万129人)これが硫黄
島戦の死闘の結果であつた。両軍に慰霊
の哀悼を捧げたい。果たして来年に硫黄
島を訪れ硫黄の匂いの立ち籠める中、英
霊に献花と献水する事が出来るだろうか

平成2年3月30日攔筆。